フェルベルグ夫妻のこと

宮崎恒二

ゴロンタロの空港は思いの外，市内から離れていた。市内に向かうには，乗合コーチを使うしかなかった。「ホテル・ムラティへ」と行き先を告げると，運転手は一瞬考え込んだ。「町のど真中にある古いホテルだそうだが…」と付け加えると，彼は，ああそうか，というようにうなづいた。空港から町までの道はきれいに整備され，両側には大きな敷地の農家が点在している。入植者が多いようだ。市内に入ると，町並みは整然としていて，植民地時代の雰囲気を伝える家屋が目につく。コーチは町の中心部の運動場に面した古い木造の家の前で止まった。「ホテル・ムラティ」という古びた看板が目に入る。中へ入って案内を乞うと，肌の白い長身の老人が，不自由な足をかばうようにそろそろと歩み出てきた。

ホテル・ムラティのことを知ったのは，メナドで偶然同宿したイギリス人の青年からだった。北スラウェシの歴史を専攻しているこの青年は，ゴロンタロの様子にも詳しかった。「あなたもオランダ語ができるのなら，あのホテルに行ってみるといい。あそこの人たちは，オランダ語をとても懐かしがって聞いてくれるから」と彼は言った。

ホテルの奥から出てきた老人にオランダ語で話しかけると，彼は信じられないというような表情を浮かべた。無理もない。戦時中，オランダ人を弾圧した日本人の仲間が一人，忽然と現れ，彼の「母国語」であるオランダ語で話し始めたのだから。さきほどのイギリス青年のこと，そして私がオランダに滞在していたことなどを説明すると，ようやく疑念が解けたのだろう，老人の顔に笑みが浮かんできた。フェルベルグ氏，彼をオランダ人と呼んでいいのだろうか。外見は明らかにコーカソイドの特徴を持つ。夫婦の間ではオランダ語を使うが，ゴロンタロの町にはもうオランダ語を話せる知人はほとんどいなくなってしまったという。ゴロンタロで生まれ育ち，オランダの地を見たことはない。父親は南スラウェシ生まれの「オランダ人」，母親はジャワ人だったということだ。インドネシアに渡ってきたのは父方の祖父で，何でもネイメーヘン近くの出身らしい。やはり同じような境遇の夫人もまた，オランダ語の世界に生きているが，オランダに渡ったことはない。植民地文化の中心地の一つであったメナドの学校で知合い，結婚してゴロンタロで共に教師をしていたということだ。彼らの話すオランダ語は母音の長短が無く，タッタッタッタという感じの，インドネシア人のオランダ語に近い。

ホテル・ムラティには三泊した。朝起きてテラスに座っていると，フェルベルグ氏が不自由な足を懸命に動かして，コーヒーとパン一個の朝食を運んできてくれる。そして一緒に座って道行く二輪馬車を眺めながら，昔のことを話してくれた。このホテルはかつてホテル・フェルベルグと名乗っていたが，日本軍政時代にはホテル・アズマと改名させられた。「アズマ」とは Ayo, zaman untuk makmur Asia（いざ，アジア繁栄の時代へ）というスローガンの略だったそうだ。私がアズマという日本語の意味を説明すると，フェルベルグ氏は四十余年の後，初めて知ったと笑っていた。インドネシアが独立を達成すると，ホテルは再度改名し，今の名になった。日本軍政時代には収容所行きを免れ，スガワラという写真家の手伝いをさせられたそうだ。何かと不自由はあったようだが，日本人である私の前ではあまり悪い思い出を語りはしなかった。それよりも，独立後の混乱，現在でも続く不正，汚職に対する不満を口にした。「オランダ時代はこんなことはなかったのに…」というのが口癖だ。泊り客があると，警察に出向き，宿帳に検印をもらわねばならないそうだが，その度に二千ルピア（約二百円）を請求されるということだ。料金は一泊四千ルピアなので，結構な額を取られることになる。ふと宿帳を覗いてみると，私の名のすぐ上に，メナドであったイギリス青年の名があった。彼が泊まってから一カ月余り，一人も泊り客が無かったことになる。

独立後，オランダ系の人々の多くは本国に引き上げた。しかし，夫人が教師を続けたかったこと，そしてオランダの気候が体に合わないのではないかという不安があったことから，夫妻はゴロンタロに残った。隣で雑貨屋を営んでいる息子は，そのときにオランダに引き上げなかったことを残念がっている。話しに聞く高福祉社会，そして独立後のゴロンタロ社会における彼らの微妙な地位が，彼の思いをオランダに向かわせるのだろう。しかし両親の方は，ボロボロになったオランダ語の辞書を使って，オランダ語のクロスワードを解くのを毎夜楽しみにしながらも，後悔する様子もなく，淡々としている。おそらくオランダが自分たちにとっては「異国」であることを悟っていたのだろう。適応の不安は気候ばかりでなく，生活全般に及ぶものだったのだろう。彼らは生まれ育った土地で，異人として暮らす道を選んだ。彼らにとって，オランダは懐かしい過去のさらに向こうにある夢，遠きに在りて偲ぶ異境なのだろう。